

瑠

璃

窓

(4)

草 樂 生

◇……大阪の女義大夫連が文樂座へ初出演すること、或日刊紙などが事も仰々しく梵天を振つて宣傳したのだから、正直な世人は愈々男大夫の旅興行の留守中は、女義の人形淨瑠璃が開演されるものだと思つたらしいが、蓋を開けてみると、口惜しや玉手箱ならで、一向演じ榮へもせぬ女義の素淨瑠璃が驚く勿れ、税込の三圓二十錢といふ入場料だ、しかも此の顔觸れなら岡島會館あたりで五十錢か壹圓で「御」の字附きだが、文樂座といふ檜舞台だけに大した席料で、相當心臓の強い處を見せてゐた。

◇……だが、お客サマは正直だ、彼女たちなり彼女たちのゴ後援者連が連

日必死の猛運動もその効果香しからず毎日寥々たる義理捌きだけの入り、然し眞夏の場内で満員の人いきれでは中暑のために卒倒するかも知れず、おカゲ様で納涼興行となつてお客は喜ぶ。

◇……前觸れが文樂座最初の試み、特別長期公演、妍麗の女義を網羅しての大競艶で、氣の弱い男なら、此の廣告文を觀たゞけで堺か香里あたりの脳病院の御厄介でもなりさうだ。大體今回の女義會は決して藝術の蘊蓄を傾けた競演ではなくして、華麗にして艶美なるお姿の競艶會らしい、道理で、失禮ながら小仙や春駒などの女義界鏘々連が抜けてゐる。

◇……聞けば此の興行も、先般東都

から素女一行が乗り込み、文樂座で短期公演ではあつたが素晴らしい成功を収めて堂々と東都へ凱旋したのに對し刺戟？ 嫉視？、その道の豪ら方を通じて松竹を動かし、表面は因會女子部の主催、事實は松竹の興行で男大夫連の居らぬを幸ひ……留守をまもるは女房の勤め、と殊勝な心がけから平素仲の良い者同士が二組を構成、毎日交替出演のもとに開演されたものださうな

◇……それにしても浪花女義大夫大會とあれば、何をおいても一方の旗頭たる小仙が抜けてゐることは不思議だ巷間傳ふるには、小仙には何等の交渉もなかつたといふが、小仙のやうに達人となると、顔(美醜)の問題ではなくして、顔(位置)の順が一座のモメとなるからだといふ。所詮女らしい勢力争ひだが、弱者よ汝の名は女也。

◇……春駒は、事苟くも大阪の女義大會たるものが、女義界切つての藝の達人小仙さんが抜けてゐるやうな大會

には眞ツ平御免だと、小仙に對する同情休演で聊か氣慨の片鱗を見せたのは痛快であり、何にしてもその名の競演ではなく競艶會であることを御兩所とも深く／＼アキラメ給へかし。

◇……大御所松竹たるべき者が、斯様な羊頭狗肉の興行に左袒するとは何事だ、若しそれ女義登傭を畫するならば此の際思ひ切つて女大夫のみの、或は男女混合の本格的な人形淨瑠璃を開演する氣は無いか、と敢て問ふ。

◇……元來文樂座には恐ろしい傳統の力が潜んでゐる、文樂の本床には絶対に女を上らせない、萬一そんな事が實現した曉は事の正否を問はず、我々是我々の名譽を賭しても反抗するといふ男の大夫、三味線連の脅迫があるに聞かぬが、昔の紋下の稱呼は高位の方より賜つた名譽の官名ともいふべきもので、此の神聖なる紋下の高座に女は罷りならぬとの理窟は、千年も前の高野山に女人禁制を命令した時代であつ

て、今時そんな非常識な妄語を繰り返す者もあるまい。

◇……一時斯道の異端者扱ひにしてゐた芝居小屋のチョボの台に得々と坐つてござる男大夫もあれば、地方巡業では女祭文語りの床へ平氣に上る大夫もゐる。それが文樂座の本床である限り、女人禁制なりとは餘りにも割切れない算盤だ、女義も素人もない。堂々と本床に坐るに憚ることあらんや、合邦の台詞ではないが、『誰に遠慮もない』はづ、それを本床の神聖呼ばりは時代不認識も甚だしい。

◇……吾々が郷土藝術として、否！日本の古曲藝術として、其の發展に、其の保存に銳意惟れ努めてゐるのは敢て『文樂座』と稱する建造物ではない何々座であらうが何々館だらうが何々俱樂部であらうと、それは問題ではなく、只々『人形淨瑠璃』そのものを尊重するのである。それが一部の特殊階級によつて左右されるやうでは、聽て

は能樂同様、大衆から見放された存在に陥るだらうことを杞憂する。卑見だが、淨瑠璃は大衆と放れて存立しない藝術である。勿論、大衆に媚びるの要はないが、大衆の共鳴を得ねばならないから、共鳴される捷徑として先づ接近せねばならない、相手をヨリ近づけることである。

◇……文樂（小屋ではない）に大衆を接近させる一便法？として女義を登場させることも斯道の獎勵策であるが、文樂座の床には相變らず女人禁制だと時代錯誤の妄論を固持するモノがあるなら彼等が自然と旗を卷くに至る迄（それも餘り遠くはない）何所かの空き小屋を利用すれば良い。

◇……若しそれ男の人形遣ひが拒絶するならば、幸にも貧弱ながら現在巾櫛の所謂獨り遣ひの人形で暫定的に演出させてもよい、勿論變則的な人形ではあるが、これとて自然が解決する、尤も文五郎君や紋十郎君が既に婦人連

の清元や常盤津の地で人形を遣つた例があるのだから、女義だとして他の連中から抗議さへ無くば頭から拒絶することもあるまい。

◆……語る人が女であらうが其の語られるものが義大夫である限りは實際に斯界の向上發展を計るべき義務ある者は文句なしに一致協力すべきだ。況んや現時局下總らゆる部門に亘つて男性に代つて女性が進出してをる、否せねばならない秋に獨り文樂のみが時代に懸け離れての存在は許されない。

◆……かくして大夫、三味線はもとより人形遣ひにも女性の後繼者が出現することは必然で現在文樂の存続について誰れもが最も頭を痛めつゝある人形遣ひの後繼者と云ふ問題も案外樂に解決するのではなからうか。

◆……一方女義連中は一切の從來の行き懸りを棄て嫉視、猜疑、反目等の女義の通弊を清算して徒らに競艶を事として棧敷のゴ最良客のゴ機嫌を取る

暇には確固たる團結の下に藝道の修業に精進さへすれば紋下と云ふ格式も松竹社長より授け賜るやうになつた近例より推して或は近き將來には女の紋下と云ふ夢の様な事實の出現を見るに至るかも知れない。

◆……敢て奇を好むにあらず、要は世界七不思議の一同と云はれた「人形淨瑠璃」の凋落といふ現實には此の際男も女も黒も白も一齊に奮起せねばならぬ、何々協會だとか何々保存會だとかいふ机上の論のみでは此の大本の倒れんとするを支ふべき力にならない。

今日迄文樂の關係者なり當事者は餘りにも他力に依存し過ぎた、今からでも決して遅くはない「女義大夫の人形淨瑠璃」や「男女合同の人形淨瑠璃」も面白い、文樂が大衆に媚びずとも敬愛される方法は未だいくらもある筈だ。

◆……前號の「瑠璃窓」に書いた審査會の記事に對し各方面より多數の投書が舞ひ込んだ、大體に於いて筆者と

同感、審査會そのものは一種の素義の登龍門として必要だが審査員なりその審査方法に異論がある様だ、中に祇園甲部淨瑠璃科擔任教師である六世友治郎門下の逸才鶴澤友造君より「義大夫技藝試験に審査員が心得おくべき事柄を示す」と題して御自身が先般施行せられた祇甲最初の義大夫の試験制度に實行せる審査方法を微細に書き連ねて送つて來た。大方素義審査員諸君の御參考になるに充分と思はれるので次號に掲載するから御一覽ありたい。

◆……尙多數の投書に依ると肝腎の地元の關西よりも關東方面の讀者に熱心なる反響のあつたことが認められた。淨瑠璃も『大阪より東京』の方がすべてに熱があるやうに聞いてゐたが事實こんな投書振りから察するも、義大夫も清元や常盤津の如く早晚東都に移つて東都で育てられる淨瑠璃となるのではないかと思へば、郷土藝術の保存に奔命せる筆者だけに一抹の寂しさを感じずにおれない。